

旅ということ

「旅」は古くは、常に命の危険に直面するものであった。旅立つ者は、身近な人に下紐等に守護霊を結び込めてもらい、留守を守る家人は旅立つ人の寝所をそのままに守り続けた。覚悟を決めての旅である。だからこそ、旅の途中の峠、岬、道のそれぞれの神に対しても旅の安全を祈願し手向けをして通ることが必要だった。夜には、魂が抜け出るのを鎮めるために歌を詠むということを行なった。一つ一つが真剣な意味のある行為だった。

万葉集や古今集で有名な旅の歌を学んだことがあると思う。山部赤人の歌には、富士山を詠んだ歌や、市川市真間の手児名伝説に因んだ歌がある。(詳しくは図書館で)

- ・田子の浦ゆ打ち出て見れば真白にぞ不盡の高嶺に雪は降りける(318)
- ・我も見つ人にも告げむ勝鹿の真間の手児名が奥津城ところ(432)
- ・勝鹿の真間の入江に打ち靡く玉藻苅りけむ手児名し思ほゆ(433)

古代の旅は所謂役人の公用の旅であり、一人～数百人という、位や目的による編成人数の差や日程も一日～数年かけての旅(遣唐使等)などもあった。もっといえば流刑の旅も、納税の旅、防人としての旅もあった。

旅は、出発地から到達地への過程を言い、移動の時間・空間の中で、生活の本拠地である日常性から離れ、家庭・学校という環境から離れることである。一つ一つの未知の世界と自分との接触の中で異なるもの、同じものに出会い、感じ、考えることが重要である。旅を通じて、多くの他者と出会うことで、自分と向き合い、「自分」を認識すること、このことが実は一番の目的かもしれない。

みなさんの旅がよりよいものになって、沖縄の人々の悲しみや喜び、明るさや元気をしっかり受け止めて、一回り大きくなって戻って来ることを期待している。